

座談会

総合型地域スポーツクラブへの 障がい者スポーツの導入 Part.2

平成26年度、公益財団法人日本レクリエーション協会が文部科学省からの委託を受け、公益財団法人日本体育協会と公益財団法人日本障がい者スポーツ協会の三者が連携して実施した「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」。そのモデル事業として、全国9つの総合型クラブが実際に障がい者の方々を受け入れ、スポーツ教室を開催しました。そして、その事業をまとめたガイドブックが発行されたのを受け、これらの情報を広く発信するため、障がい者スポーツに携わる皆さんにお集まりいただき座談会を行いました。今月は先月号に続きその第2弾として、総合型クラブの使命や2020年東京オリンピック・パラリンピックまでの5年に成すべきことなどを率直に語っていただきました。

4

総合型地域スポーツクラブに 障がい児・者を受け入れることの意義



対談者

松尾哲矢氏

立教大学コミュニティ福祉学部教授
「地域のスポーツクラブにおける障がい者
スポーツの導入」事業協力者会議座長

大日方邦子氏

パラリンピック金メダリスト(アルペンスキー)
電通パブリックリレーションズコンサルタント

増田康太氏

NPO法人クラブしっきーず
クラブマネジャー

戸沼智貴氏

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF
企画・広報担当

菊地 正氏

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF
副理事長
総合型地域スポーツクラブ
公式メールマガジン 編集長

【写真後列(左から)】菊地正氏、増田康太氏、戸沼智貴氏
【前列(左から)】松尾哲矢氏、大日方邦子氏

老若男女のコミュニティ
それが総合型クラブの役割

松尾(敬称略) 総合型地域スポーツクラブで一番重要なのは、コートから離れたところの活動です。例えば、ミートイングをしたり、みんなでお茶を飲みながらおしゃべりをする空間づくりが大切で、それこそがクラブワークだと言われています。そこでお聞きしたいのですが、障がいのある方を総合型地域スポーツクラブで受け入れる時、コート外ではどんな工夫をしますか？

戸沼 支援をしましょうとか、みんなで助けてあげましょうというのは一方通行になってしまふことがあります。そういうことではなくて、一緒に「機会」をつくりましょうという話をするようにしています。一緒に楽しめる場をつくりましょうということですね。

菊地 これは障がい者とか健全者に関係なくクラブづくりの原点で、会員には幼児から高齢者の方までいます。その中で全体のコミュニケーションをどう取っていくかというのが、総合型クラブの大事な基本の部分です。特にうちで感じるのは、障がいのある

総合型地域スポーツクラブへの障がい者スポーツの導入

4 | 総合型地域スポーツクラブに障がい児・者を受け入れることの意義

方のお父さん、お母さんは、皆さん非常に積極的に前向きな方が多く、自分たちで学校の中にダンスクラブをつくったり、リーダー的な役割をする方もいます。

我々がこれから地域に拠点をつくっていくには、我々の力だけでは限界があります。その中でそういったクラブを活用して、小さくてもいいからチャンスをつくっていくという形が見え始めています。総合型クラブとしては、ご家族やサポートしてくれる方たちのコミュニティを作っていきたいですね。

松尾 コミュニティづくりは、簡単にできないのではないですか？

菊地 コミュニティと言っても立ち話ができる、そういうのもいいと思うのです。例えば、1週間に1回クラブに来て肩を回したり、寝転がって足を回したり、終わったらみんなでおしゃべりをする。そういう場づくりをクラブができればいいと思うんですよ。

子どもたちも学校の部活が終わってから、夜、うちのクラブに常に300人くらいが集まってきます。もちろんその子たちのうまくなりたいたいという気持ちも大事ですけど、お父さん、お母さんの了解の下、夜、外に出て友達と

遊べるのが魅力で、それが正に小学生にとつてのコミュニティなんです。ですから、競技スポーツとして技術を磨く専門家の指導者よりも、楽しみながら遊んでくれて面倒を見てくれるおじさんがいた方がいいんです。そして、結果的に種目が増えていくという感覚でやっていければいいのだと思います。

戸沼 「この時間は必ずこれをやってください」という方向ではないです。そこに集まったお母さんたちが「こういうのがいいですよね」「ではそれをやりましょう」という、引き出しを増やすことを意識しています。

松尾 お話を聞いていると、SELFさんはすごくうまくいっているようですが、実際に進めていく上で一番の課題は何ですか？

菊地 やりたいと言っても協力者がいないということですよ。

戸沼 今、抱えている課題は広報をどうすればいいかということですね。今回の事業を見ても全国9クラブでそれぞれの方がありました。やり方方の提示も大事ですが、この活動に関わ

ることによってつくられる共生社会のビジョンなども含めた広報・情報発信が必要なのではないかと。

松尾 情報発信は分かりましたが、共生社会とはどうつながるのですか？

戸沼 ビジョンを共有して、創造しましょうということですよ。2020年の東京オリンピック招致のプロモーションビデオもそうですけど、スポーツを「手段」として創造されたものをクローズアップして出すようにどんどんなってきたですよ。企業の広報戦略もデジタル戦略もどんどんそちらの方向にいつているので、何か新しいことをやるのではなく、すでにあるものをつなげていく編集力と広報力だと思っています。今一番必要なのは広報・伝達だと思っています。

松尾 大日方さんは今のお話を聞いていかがですか？

大日方 私は都内に住んでいるのですが、東京の特性というのでしょうか、なかなか地域でつながりにくいんですね。総合型クラブがあるというのは知られていても、実際にどのような働きか入ればいいのかという最初の働きか

けが難しいです。しかし、日常の中で情報としてどんな活動をしているのかが見えてくれば、そこに行ってみようというきっかけになります。そういったきっかけづくりと情報発信が必要だと感じます。

戸沼 早速、ガイドブックを見た埼玉のクラブからSELFに問い合わせの連絡がありました。

大日方 それがいいですよ。すごく難しく考えるときはなくなるケースもあると思うので、やればできる、その気になればというのが運営のクラブマネジャーにとって必要な力だと思います。みんなをその気にさせる、あるいはみんなが考えていることを引き出す力ですね。

増田 今回のモデル事業の際に、ガイドブックに参加者の写真が載った場合、肖像権の問題が出たらどうしようと考えました。電話やメールで済ませることも可能ですが、一軒一軒家を回って了解をもらうのが大事なことだと思います。多分、そういう行動をとろうと自分を突き動かす情熱が必要なのだと僕は思っています。

5 2020年パラリンピックの開催と 総合型地域スポーツクラブの使命・期待

自立したクラブ運営が これからの大きな課題

松尾 これからの総合型地域スポーツクラブの使命と期待についてお話をください。

増田 今回、モデル事業をするに当たって「対象をどうしますか」と指導者の方々に聞かれた時、「どなたでもです」と答えました。すると、「それは厳しいんじゃないですか」と言われました。しかし、しつきーずとしては「どなたでも」というのを大事にしています。対象者を限定したことによって参加希望者にお断りするのは絶対に嫌だったので、そこは譲らなかつたところですよ。しつきーずの使命としては、子ども、若者、シニア、障がいのあるなしにかかわらずどなたでも受け入れていきたいのです。

2020年に向けては、パラリンピックを開催するからといって競技者の方だけにスポットライトが当たっていればいいのかというと、実はそうではないのが地域、街だと思っています。2020年までつながっていてそれ以降は途切れてしまうという関係にはしたくないですし、つながり続けることが大事だと思っています。

ながり続けることで、その先にいるいるなことが生まれてくるからです。それは時間も手間もかかることですが、手間暇をかけるのを大切にしたいですね。

なぜそう思うのかというと、シニアさんと一緒に太極拳などのプログラムをやっていると、皆さん手間暇かけてやっているのが見えるからです。そういったプログラムと一緒にやることで、僕自身もシニアさんたちに成長させてもらっているという意識がすごく強くあります。多様な人のつながりの中で生きていくからそういう感性は磨かれていくのだと思うし、気付くことでもあるのです。ですから、街に暮らす人みんなできつていくということを大事にしていきたいと思っています。

戸沼 総合型地域スポーツクラブの使命は、情熱を絶やさないためにきちんとした運営・経営をすることで。思いだけでやるのは、何も補給しないでマラソンをして途中で倒れてしまうのと同じことなのです。そうい



増田康太

うことではなくて、ちゃんとした靴や服、食べ物が必要です。はっきり言って資金、自主運営、自立、これが総合型地域スポーツクラブの絶対的な課題になっています。

確か地方創生の中でLM法人（ローカルマネージメント）の設置が検討されていますよね。その中に福祉分野があり、投資が受けられるようになるそうです。正にスポーツが突破口になるのではないのでしょうか。

スポーツを通じて、そういった福祉や、地域づくり、社会づくりができるのだということをも2020年までに形として見せることです。今、その波がきているので、これからの5年間でその波をうまく活用できればいいと思うんですよ。それがこの5年間に我々がやるべきことです。障がい者入



戸沼智貴

スポーツをきっかけに経営・運営を今一度考えて、我々が思い描いている炎を絶やさずにトーチでつないでいく。そのトーチをつくるのが我々のやるべきことだと思えます。

松尾 障がい者スポーツという点ではいかがですか？

戸沼 スポーツそのものもそうですが、近視眼的に見るのではなくてもう少し多様な価値観で世界を見てみる。そうするとこれまでですであつたものが、「これもつながる」、「これもある」というふうにごんごん出てきます。

松尾 一番いい波がきているこの5年間に、それをきちんとかんがいでいく

ことが重要ですね。
戸沼 それは経営者としても必要な感覚だと思います。

菊地 これから100年続くクラブ運営をしていくためには、やはり魅力あるクラブにしなければいけません。会員さんが楽しみに来

てくれるように、クラブマネージャーも経営側も会員さんもみんな魅力のある人であれば、人を引き付けることができます。そういうクラブにしていくためには、障がい者スポーツも含めて一つにならなければいけないと思ってるんですね。

それに僕は障がい者という言葉自体がなくなつてほしいと思つています。よく言うんですけど、目がだんだん悪くなつてきて眼鏡をかけるのも障がいを持つていることだと。たまたま眼鏡という道具があるから普通に生活しているわけで、そ



菊地 正

れとまったく同じだと思ふんですね。そういう世界をつくっていきたくいですし、そういうクラブにしていきたいです。オリンピックレガシーとして、オリンピック・パラリンピックが終わった2020年以降はそういうクラブにしていこうと強く思っています。クラブとしてもそこを大きくアピールするために、オリンピックの現場で開会式のサポートや行進の先導などで、障がいを持つ方々にたくさん活躍してもらいたいですよ。日本体育協会を含めて、東京都にもJOCにもこれからお願いしようと思つています。

スポーツに関わつても関わらなくても、障がいを持つていたとしても、前向きな人たちがごんごんオリンピックやパラリンピックに参加する。そ

してオリンピック・パラリンピックを見事に成功させて、関係づくりを進めていく。そういったことを総合型クラブが中心となつてできる世の中をつくっていきたくいと大きな夢として考えています。ぜひ、関係の先生方、皆さん忘れないでください。絶対にやりたいと思つていますから。

CLUB for ALL 地域スポーツクラブへの障がい者スポーツ導入 (ガイドブック)



全国に約3,500ある総合型地域スポーツクラブの中から、地域性や障がい者スポーツへの取り組み実績の有無を勘案して9クラブをモデルクラブに選定。本冊子は、今回の事業活動を通じて浮かび上がってきた実践のためのヒントや課題などを総合型クラブ向けのガイドブックにまとめたものです。

6 総合型地域スポーツクラブのこれから。 お互いを支え合う力

**2020年のレガシーは
共に在ることが
当たり前の中の**

松尾 今まで皆さんの話をお聞きにな
って、大日方さんご自身のお考えを含め
てコメントをいただければと思います。

大日方 「パラリンピックには社会を変
える力がある」という言葉があります。
社会を変えるというのはどういうこと
かと考えた時、日本で今一番変えなけれ
ばいけないのは、ある一つの視点におい
て障がいのある人は別の存在だとい
う見方です。いわゆる健常者と障がい者
を分けることをやめて、みんな同じで
と思えるように、2020年の大会を
通じてやれるといいなと思っています。
そして、その先に見える社会とい
うのが地域だと思うのです。結局、一人
一人が暮らしている自分たちの地域の
中に、眼鏡をかけた人もいる、高齢者
もいる、若者も子どももいる。多様な
社会がここにあるのだということ、
理念ではなくて肌感覚として当たり前
になるということです。
オリンピック・パラリンピックが終
われば街は静かになり、街も随分変わ
ると思います。その時に日本中のそれ
ぞれの地域で、何か当たり前になっ

ことがあるよねと、それが
レガシーだと思つたのです。

レガシー教育に関する
議論が今、盛んにされ始
めています。1964年
の東京オリンピックのレ
ガシーって何だろうと考
えた時、例えば、「ツバを
街の中で吐かないように
しましょう」というマナー
を伝えたり、「ルールを守
りましょう」というような
ことですね。

今となつては当たり前なことが当
時、日本全国津々浦々に広がったの
と同じように、自分たちの地域にはい
るな人が住んでいるということが伝
わるのが一つのレガシーだと思つてい
ます。そうなつた時に、何でそれを体
験できるのかというと、一つはスポー
ツだと私は思います。

スポーツと言うと競技に目がいきが
ちです。しかし、総合型地域スポー
ツクラブが目指すものは、スポーツを通
じた地域のつながりをつくっていくこ
とです。できればそういう中からオリ
ンピックを目指したい人、パラリンピ
ックを目指したい人を地域で支え、応
援できればいいですね。自分の地域か
らトップアスリートが出た時に応援し



大日方邦子

たいという一つの土台となればと思
います。それは国体の選手でもいいです。
何かを一生懸命やっている人を応援す
る形で、みんなの気持ちがあつて
いくクラブの一つとして総合型地域スポ
ーツクラブがあつてくれると思います。
経営が難しいということは皆さんお
っしゃいます。気持ちだけが空回りし
て、思いだけではできないというのも
一方にはあります。そこを支えてくれ
る人を増やしていく努力、新しくファ
ンをどんどんつなげていくことがクラ
ブマネジャーの方たちには求められて
いるところですね。
地元だけで完結するのではなく、ク
ラブとクラブでつながり合い、情報を
取っていくことで、経営というところ
でも力になると思います。



松尾哲矢

松尾 皆さんのお話を聞いていて2つのことを申し上げたいと思います。これからの動きの中で大日方さんが2020年のパラリンピックのレガシーとは何かといった時に、当たり前という感覚がどこで生まれていくのかとおっしゃいました。すべての人たちがその人らしくスポーツを楽しめる時代、これを「成熟社会のスポーツ」と呼ぶと私は思っています。そして、やっとその扉が開かれました。しかしながら障がい者の日常のスポーツを支える環境はいまだ整っているとは言えません。そういった意味で言うと今こそ障がいの有無に関わらず、すべての人がその人らしくスポーツを楽しめている日常の風景が、2020年に向けて当たり前前になつていくということ、本気になつてやっつけていかなければいけない時なのです。

例えば、1964年に開催された東京オリンピック直前の1962年にスポーツ少年団をつくり、その5年前には体育指導委員という仕組みをつくって広めてきました。ある意味それが当たり前になつたのです。そして、これから動いていく中で総合型地域スポーツクラブの役割は、極めて大きいのです。例えば、明治以降、学校制度が整っていくに伴って、教育の効率化という視点で障がいのある子とない子を分けて教育することが一般化してしまいました。その結果、子どもたちは障がいのある子を見たことがない。車イスを初めて見たというようの子たちがつくられてきました。しかし、総合型地域スポーツクラブで子どもたち同士が交流すれば、共に在ることが当たり前になります。それができるのが総合型地域スポーツクラブだと思います。そういうことを担いながら、

みんなが時代とともに生きていく、共生社会を実現しようじゃないかという、大きなビジョンを抱えながらやっていくことが大切だと思います。次に2つ目です。江戸時代に、俳諧等のサークルが多数あったそうです。土農工商という身分

制度があった時代に、武士や農民もいれば、女性も男性もいるというサークルが山ほどあったと言います。そして、小さな村で俳諧のコンクールをすると、4000も5000も集まってきた。トップは女性で次は農民、次は武士というようなことがたくさんありました。日本においてはそれが時代をつくっていくネットワークとして非常に重要でした。土農工商という強いネットワークがあり、その次に血縁のネットワーク、そして第3のネットワークとしていわゆるサークルが、社会の中で非常に重要な役割を果たしてきました。オープンな情報伝達に優れ、友が友を呼んで、サークルが時代をつくり、江戸時代を支えました。

しかしそれが、江戸、明治、大正、昭和、平成と流れてきた中で、平等社会と言いつつも、老若男女、障がいがあるなし等によってカテゴリー化され、関係もカテゴリーの中でつくられてきたことが多く、孤立化の問題も生み出してきました。それをもっと大きなネットワークとしてつなぎ直していくというのが総合型クラブの理念だと思っています。ですから、我々がやるうとしていくことは、最近突然始めたことではなく、歴史的に日本が培ってきたオープンなネットワーク、一つのシステムをもう

一度つくり直そうという運動なのです。今こそ踏ん張って時代を担うということを感じながらしっかりと進めていかなければいけないし、正にそういう時代がきています。その中心になるのが総合型における障がい者スポーツの考え方、「みんないていいんだよ」という空気感と実感、それが2020年の当たり前前になつた世界がつくれるかどうかがかかっています。

皆さんのお話を聞きながら、「頑張れ総合型！」をメッセージにしたいと思いました。

耳より情報 ガイドブックがダウンロード可能に！



座談会でご紹介した「地域スポーツクラブへの障がい者スポーツ導入」(ガイドブック)は、pdfデータとしてすべてのページが公開されており、どなたでも見ることができます。お手元にガイドブックのない方は、次の日本レクリエーション協会のホームページよりダウンロードしてください。事業の実施をした9つのクラブも紹介されています。

<http://www.recreation.or.jp/business/sports/possibility/club4all/>